

ニュース・メディアの信頼性の構築に関する問題提起

山口 仁*

1 はじめに

本稿の目的は、社会的構築主義の視座を手掛かりに、現代のメディア環境におけるニュース・メディアの信頼性の構築過程について検討し問題提起することである。現代のメディア環境を表現する言葉は「情報化社会」、「インターネット社会」、「ソーシャルメディア社会」など様々ではあるが、そこである程度共有されているのは既存メディア、すなわち新聞やテレビなどのマス・メディアの置かれた苦境である。マス・メディア組織が経営的に苦境に立たされているという問題だけではなく、ニュース・メディア（≡ジャーナリズム）としての信頼性が低下しているという問題もある。確かにニュース・メディアの活動にとって経済的な基盤は必要ではあるが、それ以外にもオーディエンスから信頼されることが必要である。

では、そもそも「メディアが信頼される（信頼できる・信頼性がある）」とはどのような現象なのだろうか。メディアの信頼性に関する議論は得てしてそうした問いをせずに、実践的・規範的・訓詁的な観点から議論を展開してきたように思える。そこで、本稿では「メディアの信頼性はどの次元に存在するものなのか、それはどう生まれ維持され変容するものなのか、そして現代社会ではどのような特色を示すのか」という関心のもと、問題提起をしていきたい。

2 社会的構築物としての「信頼性」

まず、本稿において基本的な概念となる「信頼（性）」について考えてみたい。社会学者のニクラス・ルーマンは人間社会において「信頼」が必要とされる理由について、以下のように述べている。

将来は、人間のもつ現在化の能力の手に余るのである。にもかかわらず人間は、このような常に複雑な将来を伴った現在において生きていかねばならない。従って人間は、自らの将来を現在の尺度で不断に剪定し、複雑性を縮減していかねばならないのである（ルーマン 1973=2010：19）。

私たちが「ニュース（・メディア）を信頼する」というときにも、そこでは「自らの将来を現在の尺度で不断に剪定」している。ニュースを受け取った人々の「将来」には様々な可能性がある。その中には、いま受け取った情報が間違っている可能性、将来それが間違っていたと判明する可能性、さらに送り手が意図的に情報を操作している可能性、といった「好ましくない」可能性も含まれている。しかし、われわれはそうした可能性があるにもかかわらず、今まさに「そういうことは

*やまぐち ひとし 帝京大学文学部社会学科 准教授

ないだろう」と判断している。つまり、ニュース・メディアやその情報をとりあえず「疑わない」のである。メディア・リテラシーの重要性を訴える議論では、しばしばニュースを疑うことの必要性が強調されるが、すべてのニュースを疑うことは原理的にできないし、われわれも実際にはそうしていない。通信社が伝えるニュースもインターネット上の匿名アカウントの書き込みもどちらも情報であるが、「通常」は後者ではなく前者の方を信頼する。またインターネット上の情報でも、政府ドメインのものなら、権威ある学会のサイトに掲載されているものなら信頼できる…、という判断を私たちは日常的に繰り返し行っている。言い換えれば、そうした情報・情報源に対する疑いを停止している。

こう考えるとわれわれが「何かを信頼する」ということは、「信頼できる（信頼性がある）」と解釈する、もしくはそうした解釈を当り前のものとして意識することもなく受け入れるということである。つまり「信頼できるメディア」とは、われわれの解釈を通じて形成されるものなのである。

3 社会的構築主義の視座の適用

このように信頼性をニュース・メディアの諸活動そのものではなく、そうした諸活動についての人々の解釈にもとめる視座は、極めて「社会的構築主義的」なものである。「社会的構築主義」といってもその視座は多様なものであるが、ヴィヴィアン・バーは、①自明の解釈への批判的スタンス、②（解釈の）歴史的および文化的な特殊性、③社会過程によって支えられる解釈、④相伴う解釈と社会的行為、の4つが社会的構築主義の主要な条件であるとしている（バー 1995=1997：3-12 参照）⁽¹⁾。この4つの要件を参考にしながら、メディアの「信頼（性）」を社会的構築主義の視座からとらえなおしてみると以下ようになる。

① 信頼性はニュース・メディアの実態を反映するとは限らない

構築主義的な発想では、人々の解釈・知識は必ずしも自然的・社会的な現象を忠実に反映したものではないと考える。しかしそういう解釈が当り前のものとみなされていくことを批判する（ジェンダーなどが典型的）。

本稿の問題関心に引き寄せて考えると、つまりわれわれがあるニュース・メディアを「信頼できる」と解釈したとしても、その解釈は必ずしもニュース・メディアの実情を忠実に反映したものとは限らないということである。後述するように、ニュース・メディアを過剰に信頼するときもあれば、その逆に過剰に不信感を持つということもある。構築主義はそうした解釈を疑う視座を提供する。

② 信頼のされ方は歴史的・文化的に異なる

構築主義的な発想では、物事を解釈する仕方は不変ではなく、時代や社会によって異なると考える。バーは「どんな文化にも特有の知識の諸形態があり、したがってそれは文化の所産（前掲書：6）」と述べているが、同じような現象でも時代や社会によってその解釈のされ方は異なる。ある時代に問題視された行為が、別の時代では賞賛されたりする事例は枚挙にいとまがない。

本稿の文脈でいえば、われわれがニュース・メディアを「信頼できる」と解釈する仕方も時代や社会によって異なるということである。ニュース・メディアに期待される役割や規範も常に同じで

はない。もちろん「誤報やねつ造はしない」という基本的な事柄に関してはそれほど差がないだろうが、ニュースを伝える際にはどこまで価値観・立場性、感情を込めるべきなのか、どんな報道スタイルが好ましいか、こうした規範は時代や社会によって相応の差が出てくるだろう。

③ 信頼性は社会過程を通じて社会的に構築されていく

構築主義的な発想では、個人的になされた解釈はコミュニケーションのような社会過程を通じて他者と共有され、そうした解釈が繰り返し行われることで常態化・制度化し、社会的に自明視されていく。こうして特定の解釈が、社会的に構築されたものになっていく。

あるニュース・メディアが「信頼できる」という解釈も個人的なものにとどまればそれは社会的に影響のある解釈にはならない。そうした解釈がほかの人と共有され、何度も繰り返されることで当り前のものになり、常識とみなされ、制度化へつながっていく。ニュース・メディアの信頼も長い間をかけて社会的に構築されてきたのである。逆にそれまで「信頼できる」と解釈されていたメディアであっても、なんらかの不祥事や事件を起こして「信頼できない」と解釈され、そうした解釈が人々の間で共有され、それが繰り返されていけば次第に信頼できないメディアとしての評価が定着していくことになるだろう。

④ 信頼性は社会的行為の正当化につながる

構築主義的な発想では、ある現象の解釈はその現象にまつわる諸活動を正当化すると考える。バーは「世界の記述ないし構築は…（中略）…ある様式の社会的行為を支持し、ほかのそれを退ける（前掲書：7）」と言っている。

本稿の文脈では、社会的に「信頼できる」とみなされたニュース・メディアはそうではないメディアに比べて、その活動が正当化されると言い換えることができる。例えば、ある地域の人々から信頼されているメディアは、その地域で取材を行いやすくなったり、その情報を人々も重視するようになる。

4 「信頼できるメディア」の構築・構成に関する議論から見えてくるもの

ニュース・メディアの信頼性を構築主義的にとらえることによって、どんな議論の方向性が見えてくるのか。本稿では以下の4つをあげたい。

① ニュース・メディアの「実態」と「解釈」である信頼との間にはズレがある

前節の①でも指摘したし、若干繰り返し気味になるが、社会的構築主義をはじめとする人々の解釈に着目する視座は、「本当の姿（実態）」と、「イメージされた姿（解釈・構築物）」とを比較し、それらの差異・ズレに対する批判的考察を可能にする。モラル・パニック論はこうした視点の典型的なもので、社会問題の「実態」と過大に描写された「イメージ」の違いを批判する。⁽²⁾

本稿の文脈ならば、次のようなことがいえるだろう。つまりニュース・メディアの「実態」に比べて、ニュース・メディアに関する信頼性が過大に／過少に「解釈」されるという問題である。そもそもニュース・メディアの信頼性は世論調査を通じて測定されるが、そうした調査データももとをたどれば回答者の「解釈」の蓄積である。調査の回答者が、ニュース・メディアの常に「実態」

を把握しているとは限らない。ニュース・メディアについての形成された「イメージ」に基づいて回答していることも十分考慮すべきだろう。もちろん、モラル・パニックのように「信頼できないニュース・メディア（≡問題あるメディア）」という過大な解釈が広まる場合もあるし、逆に根拠なく「信頼できるメディア」という解釈が広まる場合もありえるだろう。

これは私見ではあるが、昨今、「ニュース・メディアの信頼性の低下」が指摘されるはいるものの、では昔のニュース・メディアが信頼に値するものであったかといえ、かなり疑わしい。周知のように、かつての新聞の犯罪報道では容疑者は呼び捨てにされ、詳細な住所まで報道されていた。いまからみれば人権感覚に乏しいと言われても仕方ない。また著名な新聞社がいくつもの捏造事件を起こしてきたことを踏まえれば、以前のニュース・メディアの「実態」が信頼するに値するものだったかは疑わしい。「ニュース・メディアの信頼性が低下している」といってもそれはあくまでも「解釈」であり、必ずしも「実態」を反映しているとは限らないのである。

もっともこれが、ニュース・メディアにとって「よいこと」であるかといえ、むしろ逆だろう。今後、ニュース・メディアが「あるべき姿」に向かって邁進して、仮にそうなったとしても、人々がそれをそのまま「信頼できるニュース・メディア」として解釈するとは限らない。ニュース・メディアの信頼性は、ニュース・メディアの実態の次元ではなく、そうした実態に関する人々の解釈の次元に構築されるからである。

② 信頼性が構築される過程の現代的な特徴(1): 論評されるニュース・メディア

現代社会におけるニュース・メディアの信頼性の構築過程を考えるにあたっては、メディア環境の変化、特にコミュニケーションのあり方の変化を欠かすことはできない。以前のようなマス・コミュニケーションが主流だった時代では、情報の流れは「1対不特定多数」でマス・メディアはその送り手側であった。受け手側（一般の人々）は情報発信の手段をほとんど持ってなかった。そのため、ニュース・メディアの信頼性に関する解釈を個人で行うことはできたとしても、そうした解釈を公に発信し、遠く離れた他者と共有する手段はほぼ持ち合わせていなかった。たしかにニュース・メディアの信頼性が問題となるような事件・出来事はあったとしても、その端緒はマス・メディアや雑誌などの非主流マス・メディアの報道が端緒となることがほとんどだった。したがって、一般の人々がニュース・メディアについてメディアを用いて広く社会の人々と論評する機会は極めて限られていた。つまり、一般の人々はニュース・メディアの信頼性を構築する社会過程に参加することが難しかったのである。

またこれはニュース・メディアに限ったことではないが、以前はそれぞれのメディア業界で活動する人々の「実情」、業界そのもの「内実」を、一般の人々がうかがい知るのも難しかった。もちろんメディアに関する研究や論評、もしくはフィクション（たとえばメディアで仕事する人々を題材にしたドラマなど）を通じて業界の情報を知ることはできたが、そうした情報もメディアが発信するものとして「編集」が行われていた。しかし、昨今のメディア環境、とくにSNSにおける情報発信は「編集」が入りにくい。こうした情報が「本当」のメディアの姿かどうかは別にして、少なくとも表面的にはニュース・メディアの「実情」や「内実」はインターネット・SNSによって可視化が進んだ。かつてはそれほど可視化されていたとはいえないニュース・メディアの取材行為も、昨今では一般のSNS利用者が簡単にそれを記録し公に発信できるようになった。

以前だったら、さして問題視されなかった（もしくは問題視されたとしてもそれを他者と共有する手段がなかった）ニュース・メディアの諸活動をめぐって解釈が行われ、「信頼されるメディア」が構築（多くの場合は脱構築だが）される。たとえば、被災者を取材するニュース・メディアの「横暴」な活動は、SNS利用者によって即座に記録され、発信され、共有される⁽³⁾。メディア環境の変化によって、ニュース・メディアの信頼性に関する構築過程も活性化してきたといえる。

③ 信頼性が構築される過程の現代的な特徴(2)：構築過程の分極化・タコツボ化

さらに信頼性の構築過程に関しては、「信頼できるニュース・メディア」という解釈が共有される範囲が問題になってくる。マス・メディアによるマス・コミュニケーションを前提としていた時代では、ある解釈が社会全体で一定程度、共有されたり自明視されたりするとみなされていたように思うが、現代でもそうなっているかは分からない。むしろ、それぞれの人々が自分たちにとって都合の良い「信頼できるニュース・メディア」を構築しているのではないだろうか。

その兆候はいくつかある。例えば、ここ最近、ニュース・メディアの信頼を解釈するとき、「フェイク・ニュース」は一つのキーワードであり「ラベル」になっている。このラベルが付与されたニュースやそれを配信するニュース・メディアは「信頼できないもの」と解釈されることになる。しかしこの「フェイク・ニュース」というラベルは、特定のニュース・メディアに対して一方的に付与されているというよりは、むしろ政治・社会的に立場が異なる者同士が、お互い敵対者に付与しあうものになっている面もある。少なくとも近年の日本で出版された「フェイク・ニュース」に関する書籍を概観すると、このラベルはマス・メディアがネット・メディアに対して用いているだけではなく、逆にネット・メディアがマス・メディアに対して用いることもある⁽⁴⁾。

信頼性の構築過程の参加者が増加したことにより、ニュース・メディアはそうした主体の中の一つにすぎなくなった。端的に言えば、ニュース・メディアは論評の主体から論評の対象になったのである。もはや、ニュース・メディアは自身の信頼性の構築過程においても、特権的な地位を維持することができなくなっているのではないか。昨今のSNS上ではそう考えられる事例に事欠かない⁽⁵⁾。

それがマス・メディアかネット・メディアかはともかく、社会全体で「信頼できるメディア」を構築し、それが伝える情報を「とりあえず」信頼し、そうした情報に基づいて社会的に討論・議論を活性化させ、世論を形成し、それを政治に反映させる…それが民主主義の守るべき「建前」であるだろうが、そうした「建前」が揺らいでいる。こうした主張は、しばしば「フェイク・ニュース」批判で展開されるものであるだろう。しかし問題はもっと深刻で、「フェイク・ニュース」のメディアが台頭するからでも、「信頼できるメディア」が無いからでもなく、「信頼するニュース・メディア」を各々有している（そしてそれらの間で対話性がほとんど無いこと）ことこそ問題なのではないだろうか。

5 おわりに：ジャーナリズム論を超えて「ニュース・メディアの信頼性」をとらえる

本稿ではここまでニュース・メディアの信頼性に関する議論をしてきたわけだが、実はこうした議論は他の領域における信頼性に関する議論とほぼ平行なものになっていると筆者は考えている。それは筆者が属している（ことになっている）アカデミズムの世界についても同様である

う。大学の教育力への不満、大学の研究の低迷、大学教員・関係者への不信、そしてそうした背景には様々な要因による大学の財政難にともなう経費削減、不安定な地位に置かれる（若手）研究者たち、研究・教育に対する世間の無知・無理解などがある…こうした大学をめぐる議論は、ほぼそのままニュース・メディア業界にも当てはまるのではないだろうか。他にも高い信頼性が求められる医師や弁護士などのほかの職業に関しても、似たようなことが言えるかもしれない。もちろん、プロフェッショナリズムが求められるからといって国家資格がその信頼性の一端を担っている医者や弁護士と、ジャーナリズムやアカデミズムとは異なる面があるだろう（アカデミズムの場合は博士号が一種の資格となっているかもしれないが…）。とはいえ信頼性の問題は複数の業界にまたがる問題である、という意識はどこかに持っていた方がよいのではないか。

「ニュース・メディアの信頼性」に関する議論は、どうしても「(業界における) 実践的・訓詁的なもの」、すなわち「岐路に立つニュース・メディア」の復権のために今何をすべきかという議論になりやすい印象がある。もしかしたら「ニュース・メディアのあるべき姿を語る」という活動そのものに人を惹きつける求心力のようなものがあるのかもしれない。しかし、それはニュース・メディアの活動（≡ジャーナリズム）を社会的行為の一種として広くとらえ、その社会的役割や機能を考察していく社会科学としてのジャーナリズム研究からは外れたものになるだろう。もちろん、ジャーナリズムの現場で活動する者がこうした思考をする必要はないかもしれない。ただし、こうした思考をする何らかの活動主体があつてしかるべきである。短期的にはともかく、中長期的にはこうした思考はジャーナリズムの現場にとっても有用であると考えられるからである。本稿はこうした問題意識にもとづいてニュース・メディアの信頼性の構築過程をめぐる現代的状況について若干の視座を提供してきたつもりである。

注記1：本稿は日本大学法学部新聞研究所主催のシンポジウム「ニュース・メディアの信頼性を問う（2017年12月16日開催）」のパネルディスカッションでの筆者の報告をもとにしたものである（原稿化に際して内容・構成は変えているが）。そのため通常の論文とは異なり、問題提起主体のものとなっている。

注記2：本稿は、筆者のこれまでの議論（主に山口仁2009、2014a、2014b、2017、2018など）に依拠している。詳細な参考文献などはそれらを参照のこと。

- (1) バーの著書では「知識」となっているが、本稿の問題意識に合わせて「解釈」と言い換えた。社会的構築主義は、知識とは現象を客観的に反映しているものというよりも、むしろ現象を解釈するためのものと考えられるので、本稿の問題関心にもとづいたこうした変換もそれほど不適切というわけではないと考える。
- (2) メディア・コミュニケーション研究におけるモラル・パニック論については、山口（2009）で言及している。
- (3) 例えば2016年の熊本地震の際には、SNS上でニュース・メディアの取材のあり方が問題視された。「【熊本地震】熊本民激怒！マスコミの非常識な行動まとめ（※随時更新）」<https://matome.naver.jp/odai/2146112196695515601>（2018年2月2日閲覧）。しかし以前の災害でもニュース・メディアの取材は何度も問題視されていることを考えれば、メディアの「非常識」は今に始まったものではないわけであ

り、「実態」よりも「イメージ」が先行している可能性は十分ある。

- (4) 2016～2017年に発売されたフェイク・ニュース関連の書籍では、インターネット上で虚偽の情報を流すニュース・メディアのことが「フェイク・ニュース」と呼ばれる一方で、逆に既存の新聞社のことを「フェイク・ニュース」と呼んでいる書籍もある（山口2018参照）。
- (5) たとえば新聞社の報道姿勢が問題になったときに、新聞記者がSNSを通じて弁明を図ることがあるが、そうした弁明は即座にほかのSNS利用者の批判の対象となる。直近の事例でいえば、共同通信社のホームページで同じURLのまま記事が差し替えられたことがあった。SNSの利用者はそうした共同通信の姿勢を厳しく批判し、逆に複数の新聞記者はそうした記事の差し替えは新聞業界の慣習であると擁護・反論した。しかしそうした新聞記者のコメントが更なる批判を呼ぶことになった。詳細は以下のサイトを参照のこと。Togetter (twitterまとめサイト)「『共同通信、印象操作で山中教授を叩く』⇒『炎上』⇒『記事をURLそのままタイトルと内容をごっそり書き換えて改竄』」<https://togetter.com/li/1193280>、「共同通信の山中バッシングとは関係ないという朝日新聞記者のつぶやきとRT」<https://togetter.com/li/1193361>（両サイトとも2018年2月2日閲覧）。

引用・参考文献

- ヴィヴィアン・バー著、田中一彦訳（1995=1997）『社会的構築主義への招待』川島書店。
- ニクラス・ルーマン著、大庭健・正村俊之訳（1973=1990・2010）『信頼』勁草書房。
- 山口仁（2009）「ダイオキシン問題とマス・メディア報道：『不確実性』下における社会問題の構築過程に関する一考察」『マス・コミュニケーション研究』74号、76-93頁。
- （2014a）「『ジャーナリズム』の構築過程に関する一考察：不確実性下における『信頼』概念を手掛かりに」『メディア・コミュニケーション』64号、53-64頁。
- （2014b）「『世論』のメディア社会学・試論」『帝京大学情報処理センター年報』16、111-122頁。
- （2017）「インターネット社会においてジャーナリズム論は成立するのか？」『帝京社会学』30号、49-64頁。
- （2018）「現象としての『フェイク・ニュース』、認識としての『フェイク・ニュース』」『帝京社会学』31号、77-92頁。